

「おやすみなさい」 ルカ 23：42～49

I 導入部

おはようございます。11月の第一日曜日を迎えました。今日は、罪の赦しと復活の信仰を持って天に召されました、愛する兄弟を覚える召天者記念礼拝として礼拝を守っています。先に召された兄弟のご遺族の方々も共に礼拝に集って下さることを心から感謝致します。先に召された兄弟もどんなに喜んでおられることでしょうか。私たちは、こうして共に集い、私たちの救い主であるイエス・キリスト様を賛美し、礼拝できますことを心から感謝致します。

昨日は、恒例のリサイクルバザーがありました。準備で、当日ご奉仕して下さった方々、祈って下さった方々、お買い求め下さった方々に感謝します。今日も少しバザーの商品があるようですので、よろしければお帰りに見て行って下さればと思います。見るだけでなく、お買い求め下さったら感謝です。

今日は、ルカによる福音書 23 章 42 節から 49 節を通して、「おやすみなさい」という題でお話し致します。

II 本論部

一、あなたもイエス様と共にパラダイスに行ける

今日の、この聖書の箇所は、イースターの前のレント（受難節）や受難週に読まれる箇所です。イエス様と一緒に十字架につけられた犯罪人二人とイエス様の事が記されています。今日の箇所にはありませんが、イエス様は十字架の上で、自分を十字架につけたローマ兵や命をねらい十字架刑を喜ぶ議員やファリサイ派の人々や律法学者、イエス様をのりしり続けるユダヤの群衆のために、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」（ルカ 23:34）と祈られました。

鞭で打たれ、十字架につけられたイエス様、犯罪人の一人として処刑されているイエス様を見て、犯罪人の一人はイエス様が自分たちと同じように、十字架刑にかかるようなお方ではないことを感じます。もう一人の犯罪人が、イエス様に向かって「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」と言った時、もう一人の犯罪人は、「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」（ルカ 23:39）と自分の罪を認め、イエス様の正しさを認めたのです。

そして言うのです。42 節です。「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」 十字架刑になるほどですから、極悪非道な人生を送ってき

たはずです。自分の満足と欲望を満たすために、数々の罪を犯し、人々を苦しめ、痛めつけてきた犯罪人でした。そして、処刑されているその十字架の上で、イエス様のとりなしの祈りを聞き、イエス様の人々に対する態度つまり、恨んだり、口答えしたり、鬼のような顔をしてにらみつけるというのではなく、十字架刑の苦しみを一心に受けておられたイエス様を通して、自分の罪を認め、イエス様は十字架刑で死んで終わってしまうようなお方ではなく、御国の権威を持つお方と信じて、このような罪深い者がいたことをどうぞ、覚えていて下さい。思い出して下さいと懇願したのです。

するとイエス様は犯罪人が耳を疑うような言葉をかけられたのでした。43節です。「するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。」 イエス様は、今日と言われました。そして、イエス様と一緒に、「楽園にいる」別の訳では、「パラダイス」とあります。ずいぶん昔ですが、「帰って来たヨッパライ」という歌が爆発的にヒットしました。「天国よいここ一度はおいで。酒はうまいし姉ちゃんはきれいだ！」という歌詞でしたが、パラダイスというとパチンコ店や飲み屋の名前にもありますが、そんなものではないのです。神様と共に永遠を過ごす、最高の場所なのです。

二、神様の愛はあなたの罪を覆う

イエス様から「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた犯罪人は、初めからイエス様を信じていたわけではありません。彼は、最初もう一人の犯罪人のように、「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」とイエス様に対して厳しい態度であったのです。それが、イエス様の態度ととりなしの祈り等で変えられたのです。彼は環境のせいもあったでしょうが、彼自身の選択で悪の道に落ちて行ったのかも知れません。人生の最後、処刑の場所で、彼は起死回生の逆転の人生をつかむのです。

このような罪深い人間が、悪を重ねた人間が、そうやすやすと天国、パラダイスに行っているのだろうか、とも思わなくもない。けれども、「救い」というのは、それまでの「自分がやったこと」によって決まるのではないということです。良い事をした、正しい事をしたので、神様から愛されて天国へ行けるというのではなく、悪い事をしたから、罪を犯し続けたから救われないということではないと聖書は語ります。

たとえ、どのような罪を犯し、神の背き続けた人生であっても、神様は私たちを愛し、私たちを救おうと願っておられるのです。

この犯罪人ともう一人の犯罪人は、最初は、同じようにイエス様に対して「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」と言っていたのですが、二人の道は大きく分かれたのです。自分は悪くはなく、他人のせいだと自分の弱さや罪を認めず、イエス様に求めなかった犯罪人と自分の罪を認め、イエス様を御国の権威を持つお方、神と信じて、イエス様に「わたしを思い出して下さい」と頼った犯罪人は、天と地が遠いように、違う道が備えられたのです。

同じように、私たちも私たちの罪の身代わりに死んで下さったイエス様に、委ね、お任せして人生を歩みたいと思うのです。イエス様からお言葉をいただいた犯罪人は、良い事

も正しい事もしませんでした。ただ、自分の罪を認め、イエス様を救い主と信じて、イエス様に頼っただけなのです。

聖書には、「**憐れんでください**」と頼った者の病いを癒して下さる記事があります。「**助けて下さい**」と懇願する者に癒しを与えて下さる記事もあります。私たちが、どんなに自己中心で、神様を必要としない生活を送ってきたとしても、イエス様を信頼する者、イエス様に憐れみを求める者、助けを求める者には、大きな恵みと救いを与えて下さるのです。

ローマの信徒への手紙5章8節には、「**しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。**」とあります。私たちが、神様を知らないで、神様を無視して罪を犯していた時、そんな者のためにイエス様は十字架にかかって死んで下さり、そのことを通して愛を示して下さいましたのです。

ヨハネの第一の手紙4章10節には、「**わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。**」という言葉があります。私たちが神様を愛したから神様は私たちが愛して下さいるのではなくて、罪ある者を愛して下さいましたのです。先に召された兄姉も、この愛に触れて、神様に愛されていることを感じながら信仰生活を送られていたのです。

カトリック教会では、この犯罪人は聖人であり、「**聖デイスマス**」という名前と呼ばれ、受刑者の保護の聖人とされているのです。犯罪人であったのに、神様の大きな恵みを受けた者として覚えられているのだと思うのです。

三、お父ちゃんに任せたら大丈夫

イエス様は、午前9時から午後3時頃まで十字架刑につけられたと言われています。46節には、「**父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。**」と叫ばれたとあります。十字架の上でのイエス様の言葉が7つあると言われますが、この言葉は最後の言葉です。この言葉は、旧約聖書の詩篇31編6節のことばです。「**まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます。わたしを贖ってください。**」

「**父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。**」という言葉は、ユダヤ人のお母さんが、子どもに教える最初の祈りだそうです。今から眠りにつくので、神様に全てをお任せします、ということでしょうか。

イエス様は、「**父よ**」と呼びかけられました。父なる神様に対して子であるイエス様が呼びかけるのです。「**お父さん**」と呼びかける子どものようです。私たちが親である父に、「**お父さん、パパ**」と呼びかけます。「**父よ、お父さん**」と呼ぶイエス様の祈りは、子どもである自分自身の使命と父に対する信頼と従順を現す表現だと思えます。

イエス様の生涯は、父なる神様のみこころに従った生涯でした。イエス様は、ヨハネによる福音書10章30節で、「**わたしと父とはひとつである。**」と言われました。12章49節では、「**わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになった父が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったからである。**」と父とイエス様との関係を語っています。

イエス様は、神であり人でありました。ですから、十字架刑につくことの苦しみを思い、ゲッセマネにおいて、「父よ、御心なら、この盃をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願ではなく、御心のままに行ってください。」(ルカ 22:42) と祈られました。

十字架刑を取りのけて下さい、というのが人間であるイエス様の思いではありましたが、父なる神様の御心のままに行ってください、と父なる神様に委ねられたのです。そして、父なる神様の御心は、全人類の罪のために、イエス様が十字架で身代わりに死ぬことだったのです。イエス様と父なる神様との間には絶対的な信頼がありました。だからこそ、ご自分の死に対して「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」と叫ばれたのです。「ゆだねます」という言葉は、父なる神様に対する最も信頼する言葉です。ギリシャ語の意味は、「何々の前に置く」というような意味があるようです。「まな板の鯉」と言う言葉があります。どのような窮地に立たされても、慌てることなく、自分の身を相手に、つまり父なる神様になすがままに任せるということなのでしょう。それが、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」ということでしょう。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」とは、子であるイエス様が、父なる神様の御心、全人類の罪のために、十字架にかかって死ぬということが、自分の死で完成するということである安心して眠りにつかれた、父なる神様に全てを委ねられたのです。それは、「おやすみ」とベッドに身を横たえることに似ているような気がしたのです。私たちは、毎日、寝る前に「おやすみ」とかわすように、愛なる神様に「おやすみ」と全てをお委ねして眠りにつき、神様に全てを委ねた人生を送りたいと思うのです。

Ⅲ 結論部

先に天に召された方々は、それぞれに天に召されて行かれました。罪の赦しの喜びと魂の救い、そして、永遠の命をいただいて天に召されて行かれました。どのように復活するのかと具体的には聖書には記されていませんが、私は思うのです。私たちは、毎日お休みと寝ます。そして、朝になると目が覚めます。そのように、私たちは必ず死ななければなりません。目覚めたらそこは天国、神様の御国、パラダイスなのです。聖書は、死を眠りと表現することがあります。イエス様も12歳の少女が死んだ時、眠っていると表現されました。私たちは、誰もが生涯の終わり、死を迎えますが、それは眠りのように目が覚めるとそこは神の支配する所なのです。

先日、私は十二指腸にポリープができて、麻酔して内視鏡で検査しました。「看護師さんが眠くなりますから目を閉じて」という言葉を最後に眠りにつき、起きたら全ての処置が終わって、3時間も寝ていました。

私たちは誰もが死を迎えます。しかし、死は恐れではなくて、復活、永遠の命に向かうスタートとなるのです。イエス様に受け入れられた犯罪人は、死で終わったのではなくて、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と天国への招待を受け、死が復活へのスタートとなりました。イエス様も「おやすみなさい」と全てを父なる神様に委ねたのです。先に召された兄弟もそうです。私たちも神様を信頼して、心配することなく、全てをお委ねして、この週も歩もうではありませんか。